

鬼との書き初め

美咲町立柵原学園

四年生 鈴鹿 帆乃

冬休みが始まってしまった。

「帆乃、習字しようで。」

と、お母さんが言ってきた。

「うん。」

と、私は言った。でも、けっきょくその日はしなかった。きつとお母さんもめんどうくさかったんだらうと私は思った。ラッキーだった。次の日、またお母さんが、

「帆乃、今日こそは習字しようで。」

と言ってきた。

「うん。」

と、私はまた言った。でも、またその日もしなかった。私は、しめしめと思った。

次の日もまた、

「帆乃、今日こそはぜったいにしようで。」

と、お母さんが本気で言ってきた。するとお母さんが習字の用意をはじめた。私は、「最悪だ。」と思った。でも今日は、しないといけない日なんだと分かった。

「帆乃、用意できたけんおいで。」

と言ったので、すぐにこたつから出て、いすにすわりに行った。机の上には、習字教室で買った二十枚の紙が置いてあった。私は、

「これ、全部今日書くん。」

と、お母さんに聞いた。お母さんは、

「どうせ間違うじやろ。頑張りたいなら、そういうことばあ言わずにやってから文句言いんちやいや。お母さんもやりとおないわ。」

と言われた。書き始めると、「赤い実」の「赤」で何回も失敗した。お母さんが、

「最後まで書きんちやいや。『実』の練習をしたいんじゃけん、最後まで書いて。」

と言ってきたけど、どうにも上手く「赤」が書けず、悔しくなった。

一度休けいをして、もう一度書いて、やっと最後まで書いてお母さんに見せた。すると、お母さんが、

「はい、もう一枚。」

と言って、紙をわたしてきた。私は、心の中で、「鬼だ。」と思った。はらが立つので何枚も書いた。でも、書いても書いてもお母さんは、

「ここを直しんちゃい。」

「はらいがおいしいなあ。」

「たて線真っすぐ書きんちゃい。」

と、永遠にだめなところを言ってきた。私は悔しくて涙が出た。

「そんな言うんだったら、お母さんも書いてから文句言いんちゃいや。」

と私は怒った。お母さんは、静かに私を見た。そのあと、お母さんが少しやさしい言い方で、

「あと二枚じゃけん頑張り。」

と言ってきた。私は全部書ききった。だけど、良いのは書けなかった。

次の日、お母さんが、

「二十五枚、もらってきたで。」

と言って、習字教室から帰ってきた。私はまた、鬼が帰ってきたと思った。私は、じゅんびをされた机に向かって書き始めた。なるべく最後まで書いてから、次の紙に書くようにした。床に、何枚も書いた紙をならべていった。お母さんが、

「だいぶ良くなってきたけん、ここだけ気をつけようや。」

と、指をさして伝えてきた。私は、文句を言いたかったけど、ぐっとこらえてまた書いた。そして、全部書ききった。お母さんが、

「よう頑張ったなあ。この中から選ぼうか。帆乃はどれがええ。」

と言ってくれた。そのとき私は、これで本当に書ききったんだと分

かって、うれしくなった。おすっとしていた顔が笑顔になって、

「もうせんけんな。」

と言った。

「特別賞をあきらめてええんなら、別にせんでえかったんで。」

とお母さんが言ってきたので、

「いや、それはいやじゃ。あきらめとおない。」

と私は言った。すると、お母さんが、

「習字教室でも頑張ったし、家でも頑張ったけん、特別賞取れたらええなあ。」

と言ってくれた。

私はいつもお母さんとけんかをしながら習字をしていて、それがすごくしんどい。だけど、一人だったらぜったいに家では練習できていないだろうし、特別賞も取れていないと思う。本当はすなおに話を聞いて頑張りたいのになど心の中では思っているけれど、なかなかそれができない。口には出さないが、お母さんがとなりにおいてくれることをありがたく思っている。今年も良い結果が出て、お母さんにほめてもらいたいと思っている。